

新旧住民の混在するまち

「あふれる笑顔 幸せのまち大東づくり」。東坂浩一市長が掲げる大阪府大東市のめざすべき姿である。誰かに依存せず、みずからが主体になってこの地で豊かな暮らし、笑顔のまちづくりを進めること、これは過去からの課題であり、ようやく始まった新しいまちづくりの萌芽である。大東市は大阪市に隣接して、多くの勤労者が住まう都市として発展してきた。市発足当初（1956年）の旧住民3万人と新たに転入してきた9万人の12万人が混在する構成となっている。

新住民は基本的には寝に帰る場所であり、昔からの住民と混じり合うことなくまちなちへの愛着も醸成されにくかった。また、わずか5年間で倍増した人口の影響で、小中学校の建設や住宅の整備等に追われ、都市計画や公共施設の配置など計画的な事業実施ができなかった。

負のレッテルと依存体質

多くの自治体で都市基盤整備が一段落し、それぞれの地域特性を生かしたまちづくりを進め始めた時期に、大東市は二度の水害に見舞われた。その対応に莫大な経費を強いられ

れた結果、89・90年度と赤字日本一に陥り、国の管理下に置かれた。この遅れは人口減少へ転じる契機となり、2012、13年には大阪府内で一番人口流出の大きい都市という危機的な状況を引き起こす。

新旧住民ともに「大東市」という



第17回

「あふれる笑顔 幸せのまち 大東」 をみずからつくる

自治体改善マネジメント研究会(*)

東 克宏 大阪府大東市地方創生局長

新しい兆しと今後の取組み

12年4月、初めて「マニフェスト」を掲げて当選した東坂市長は、「マニフェストロードマップ」を策定して市政運営の羅針盤とした。ここには行政が主導するまちづくりから住

た。市オリジナルの介護予防運動「大東元気でもっとせ体操」である。65歳以上の高齢者約2000人が市内の住いの近く100か所に週1回以上体操をするために通っている。「通いの場」を運営しているのは地域の住民の方々。この住民主体がキーとなり、虚弱な高齢者が元気な高齢者の支えで元気を取り戻し、小学校の下校時の見守り隊に参加するなどの社会活動が広がっている。

今後はこの住民主導と行政支援のまちづくりを「公民連携」によって行政と市民がともにまちをつくる実践と成功体験につなげていきたい。

特に今は「自分でつくったまちに住む」を理念に、市営住宅建替えを契機にした民間事業者によるココロもカラダも幸せに暮らせる住宅地の創生、小学校跡地を民間事業者へ賃貸して付加価値の高いスポーツ・歴史文化・食のコンテンツを備えた拠点づくり、JR住道駅前の公共空間を民間事業者に開放したナイトマルシェの定期開催、大東元気でまっせ体操を核にした地域健康プロフェッショナルスクールの開校に取り組んでいる。

成功体験のなかったまちにとって、小さな取組みの一つずつが大きな歩みの始まりと言える。

*自治体で長年改善運動を推進してきた熟き職員と行政経営デザイナー元吉由紀子が共同で2013年に設立。自治体における改善運動が行政経営の目的や状況に応じて効果的かつ効率的に進められるよう、実践事例情報を収集、分析、ナレッジ化して情報発信、実践活用することを目的として活動している。ホームページ、Facebook「自治体改善の輪」を運営。共著に「地方が元気になる 自治体経営を変える改善運動」(東洋経済新報社)。